

凱風館館長・神戸女学院大学名誉教授
フランス文学者・思想家・エッセイスト

内田 樹

Know howよりも Know who 身体性を重視した関係は 説明できない物事に強い

2027年に60周年を迎える兵庫県建築士事務所協会。法定団体として地域に根ざした建築実務を通じ、社会貢献を掲げて活動してきた協会は今、変化の激しい時代においてどのような価値を提示できるだろうか。意匠の目新しさや明確な数値が以前にも増して可視化されやすくなった一方で、瞬時に理解できる分かりやすさに隠された言葉にならない姿勢があるのではないか。そんな暗黙知とも言えるものを読み解く視点を求め、神戸市東灘区を拠点に学塾・凱風館を主宰する内田樹さんを訪ねた。

聞き手: 株式会社KUUMA 濱部 玲美(神戸支部) / 執筆: 株式会社文化工学研究所 北川 浩明(神戸支部)



困難な場に身を置き続けたとき 知はあとから立ち上がる

多くの人に惜しまれながら昨年の10月に逝去された、兵庫県建築士事務所協会の会長を務めた原田 敏文さん。原田さんが遺してくれたもののひとつに「Know how(ノウハウ)ではなく、Know who(ノウフー)」という言葉がある。



1階が道場、2階に書斎と客間のあるセミプライベートスペースと寝室などのプライベートスペースが。自邸でありながら多くの人に開かれた凱風館

誰にでも共有しやすい形式知と言える Know how。問題解決に役立つシーンが多い一方で、情報に溢れた今の時代においてすべての知識や経験を説明可能な言葉として置き換えることは難しいだろう。そもそも問い自体が曖昧で説明が難しい状況においては、異なる専門性を持つ者同士が繋がる Know who の視点を持つことで、新たな道筋をひらくことを示していると読める。

Know who がもたらす関係性や信頼、身体感覚。それらは会議の議事録には残らないし、成果としても測りにくい。分かりやすいメリットやすぐに解決できる気持ちよさもないが、正解の見えない困難な状況においてそれぞれの知恵を絞り学びあう機会があるはずだ。まず身を置いて同化していくことから、関係の中で“知”が立ち上がってくる。知識やノウハウとは少し違う、生き延びるための判断の質のようなものなのだろうか。

こうした“知”のあり方を実践として引き受けてきたひとりが、凱風館を“教育共同体”であると話す内田樹さんだろう。相対的な優劣をなくして身を置き続けることで見えてくるものがあると話す内田さんは、その教えや系譜を次の世代に受け継いでいく“道統の継承”こそを大切にしているという。そこに何を心得、何を失ったというものはない。ただ淡々と修行を重ねていくのだ。

うまくやろうとする自分を手放すと 不思議と強度は増していく

そもそも“天下無敵”など、辿り着くために途方の暮れるような理念を掲げる武道において、ゴールはあつてないようなものだという。無限に続けることのできるオープンエンドな状態で、初心者も50年の修行歴をもつベテランも同じ場所で同じことを行う。

相対的な優劣が持ち込まれない状態だからこそ、学びは終わりを持たず、一生続いていくのだという。一方で、数値化による比較によって評価を行う近代教育が制度として根付いた現代において、こうした相対評価から距離を取ることは決して容易ではない。対して、内田さんは脳に頼りすぎないことを薦める。

相対的な優劣はすべて脳内現象であり、そのほとんどが視覚情報を頼りにしているからだ。見えているのはほんの二割程度で、背中やお尻、足の裏などの見えていない部分はほとんど使いこなすことが出来ていない。そうするとパフォーマンスはとて低いのだという。

身体性を重んじ、触覚や嗅覚、聴覚といった視覚以外の感覚の感度を上げていき、生き物として一番自然な状態で何も考えずとも最適な動きができるようになる。目的に向かって走り続けることよりも、場に身を委ねて行動し続ける。これこそが、強いのだ。

高経年マンションの外観調査や耐震診断、地域の相談会、



講習会や子どもとのワークショップなど地域の基盤づくりとも言える、一見日の当たらないような活動を続ける建築士事務所協会。形になるまでの道のりは長い。そんな時ほど、意味から離れて身を置くことが大切なのだろう。

個の枠を超えて 共有財を育てる協会へ

建築士事務所協会は、現代においてどのような場となり得るのだろうか。あらゆる協会は、かつて相互扶助や利益保護の観点で、生き残るために必要不可欠な存在であった。そのひとつとして、中世ヨーロッパに結成された同業者組合ギルドを例に挙げた内田さん。当時、知識や技術は個人が所有するものではなく、徒弟制のなかで継承されていくものであった。親方の元で住み込みで学び働くことで、信用を得て独立につながる。個人の技術よりもその振る舞いこそが、最大の資産だったのだ。何を持っているかではなく、誰と繋がっているか。まさに、Know who を大切にする時代だったのだ。



畳70枚が敷き詰められた道場

近代化によって、技術のマニュアル化や個人が資格を持つようになり、交換可能なスキルへと転換されていくことが増えた。便利な一方で、それ自体が進化し続けることは難しいのかもしれない。技術は個の枠に留まると更新されていかず、あらゆる人に使われ続けるからこそ、変化し続けるのだから。

「公共財の管理はある程度の哲学を知らないといけない」と話す内田さん。共有財を管理する者同士は、分かりやすいルールの中にある、物の考え方や場の読み方といった姿勢が大切なのだ。多くの弟子と凱風館を共有する内田さんは、共有財をともにする者同士が渾然一体と同化していくために、深い問いを立て合う必要があるという。修行においても体の使い方を習得することと物の考え方を深くするということは、並行して行っているのだそう。

ギルドの中で親方がその親方から、そして弟子へと受け継いできた技術は共有財としてあらゆる人の中で形を変えながら進化していった。図面の描き方ではなく、行政や市民との向き合い方など、協会の中にある関係性の中で立ち上がった“知”もまた、共有財ともいえるだろう。



本も共有財だと話す内田さん。デスクを囲むように270度本に囲まれた書斎

協会はかつてのギルドのように共有財を更新し続ける場といえるのかもしれない。

あらゆる身体性を代弁した建築は 世代を越えて共有されていく

長く神戸女学院大学の教授として教鞭をとってきた内田さんが務めた校舎は、ヴォーリズを代表する建築のひとつ。スクラッチタイルやS字瓦で統一されたスパニッシュ・ミッション様式が特徴で2014年には現存する12棟が重要文化財に指定されている。初めてそこに足を踏み入れた時、「こんなに楽しいものを作る人がいるんだ」と感動したのだそう。

建物内には効率では測れない仕掛けがたくさんあったそう。例えば教室やトイレひとつとっても階ごとに異なる外観や仕様になっていたり、ひとつの校舎を目指すにも複数の道があり季節ごとに見せる顔つきが異なっていたりと、驚かされる設計。

「ヴォーリズの校舎は、まさに学びの比喩として、最高。探究心を持ってドアを開けた人間の前に、次の世界につながるドアがある。普段見慣れた光景を全く違う角度から見せてくれる窓がある。これこそが、学び。建物でそれをやってるんです」と声を弾ませながら、校舎に造られた不思議なドアとの出会いを振り返る。

内田さんは、建築設計において重要なことは、そこを使ったり暮らしたりする人の身体性を想像することだと話す。外観や内装、動線など可視化しやすい要素に優れた建築は数多く評価されてきた。一方、そこに立つとどんな感覚になるのか、どんな素材が肌に触れるのか、どんな音の伝わり方をするのかなど、目に見えない身体性に配慮した建築は非常に少ないのではないかと。どちらが社会的に評価されているのか見てみるのも面白いだろう。経済的な資産価値と教育的・文化的価値は異なるのだ。

1933年に現在の岡田山キャンパスに移設された校舎は、もうすぐ百年を迎える。百年前の建築家が死んだ後もそこにいるのだと話す内田さんの言葉は、建築自体が答えを示すのではなく問いを投げかける存在となり多くの人と関係を結んでいくことができるのだと示してくれた。それは、建築の存在が“知”となり共有財となって、多くの人が関わり続けることで、その価値が更新され続けていくということなのだろう。

問いを引き受け続ける場には 人は引き寄せられる

AIが即時に明確な答えを提示するようになった今、問いを深める重要性について内田さんは語る。目の前にすぐに答えが用意されると、考えなくてもいい状態を作ってしまう。そこにあるのは、身体性を伴わない答えなのだ。

まだ意味づけできるような言葉にはなっていないけれど、こっちに進むべきだと感じる感覚に出会ったことはないだろうか。そこには身体性を伴った“知”が潜んでいるのかもしれない。内田さんの友人である精神科医が、AIの回答は完璧すぎる模範



書生によっていつも清潔に保たれている更衣室

回答のようなもので、それでは人間は癒せないと話したことがあるそうだ。人間は不完全な生き物だから、人間を癒すことができるのは不完全さを持った人間だけなのだ。

分からないからこそ、頭でっかちにならず身体性を頼りに向き合い続ける。そこには、誰かが既に良いと認めたものではない未だ見ぬ景色が広がっているのだろう。あらゆる地域課題と向き合ってきた建築士事務所協会も、答えを示すための機関ではないのかもしれない。分からないなりに身を置き、判断を引き受け、関係のなかで問いを更新し続ける。その営みのなかで立ち上がってくる“知”を共有しながら、協会は地域と向き合ってきたのだ。

だからこそ、協会には簡単には解決できない多くの地域課題が集まってくるのだろう。向き合うためには建物を、そして街を使う人たちの多くの身体性の代弁が必要だ。60年、そしてこれからまた先も、協会の中の人たちの手によって“知”が使われ、形を変え、更新され続けていくのだろう。問いの只中に立ち続けること。その姿勢こそが協会が長い時間をかけて引き受け、これからも担っていく公共性なのかもしれない。